

# 言語におけるアスペクト的意味の表現

杉浦 滋子

## 1. はじめに

本稿の目的は、異なる言語においてアスペクト的意味がどのように表現されるか、そしてそれをどのように記述すべきかを考察することである。

そもそもアスペクトという用語がスラブ言語学の用語を翻訳借用している(Binnick 1991:136)ことからわかるように、現在のアスペクト研究にはスラブ言語学の影響が色濃い。その理由はスラブ諸言語においては、ほぼすべての動詞に「完了体」<sup>1</sup>と「不完了体」が存在し、アスペクトの基本的対立とされる完結相(perfective)と非完結相(imperfective)の対立はこの形式的対立に基づくものだからである。「不完了体」は持続する事態、習慣的な事態、繰り返し起こる事態などに言及する際に用いられ、「完了体」は一回性の完結した事態に言及する際に用いられる。ここから、スラブ言語学では完結相を事態を点と捉えて表現すること、非完結相を事態を内部構造をもつものと捉えて表現することとされ、Comrie (1976) は、スラブ諸言語以外の言語でも完結相と非完結相が表現されると指摘した。また、他の言語の研究では完了もアスペクトとして扱われることがあるが、スラブ諸言語には完了をもたない言語も

---

<sup>1</sup> それぞれの言語における形式に言及する際には一重括弧で示す。

あり、Comrie(1976)は完結相と非完結相の対立には含まれないものの、完了もアスペクトとして扱われることが多いので扱うとしている。世界諸言語がどのような性質をもっているかを地図上に示した The World Atlas of Language Structure (以後 WALS) 65 (Perfective/Imperfective Aspect)では、完結相と非完結相の対立をもつ言語が 101、もたない言語が 121 とされ<sup>2</sup>、68 (The Perfect)では完了の形式をもつものが 108、もたないものが 114 とされている<sup>3</sup>。そして、完結相と非完結相の対立をもっている言語の中でも、もたない言語の中でも、完了の形式をもつ言語ともたない言語の数は概ね拮抗している。

## 2. 完結相・非完結相と完了

完結相(perfective)と完了(perfect)という用語について誤解が多いことはよく知られている。ここで確認しておく、完結相とは事態を分析できないもの・点のようなものとして捉えることを表現する形式であり、非完結相とは事態を内部構造をもつものとして捉えることを表現する形式である。第一節で、完結相・非完結相の対立がスラブ諸言語ではっきりした形で存在することに触れたが、現代日本語も完結相・非完結相の対立が明確な言語であり、前者はテイルを伴わない形式、後者はテイルを伴う形式で表される (工藤 1995)。例えば、過去に東京での居住期間が十年間ある場合に、(1a)(1b)のどちらの表現も可能である。つまり、表現される事態は同じであっても、二つの異なる表現が可能である。

- 1a 私たちは東京に十年住んだ。
- b 私たちは東京に十年住んでいた。

---

<sup>2</sup> ただし、日本語は完結相・非完結相が文法的に対立しない言語とされている。また、中国語はその対立のある言語とされている。

<sup>3</sup> 日本語、中国語は完了をもたない言語とされている。また、ドイツ語、フランス語では「所有動詞/存在動詞+過去分詞」はすでに完了ではなく過去を表す形式と考えてよいが、どちらも完了をもつ言語とされている。

(1a)(1b)を単独で見た場合にはどのような意味の違いがあるかということはそれほどはっきりしておらず、話者によっては両者の違いは文体的なものと受け取るであろう。しかし、この違いはよりはっきりさせることができる。(2)のように出来事を時系列で叙述する場合にはそれぞれの内部構造を問題にしないので、完結相での表現が適切で、非完結相での表現は不適切である。

- 2a 私たちは東京に十年住んだ。その後父の転勤があり、八年神戸に住んだ。  
b ??私たちは東京に十年住んでいた。その後父の転勤があり、八年神戸に住んでいた。

別の動詞の例を挙げる。例えば、ある目標のために募金箱を持って街頭に立ち、募金を募るという状況があるとする。その際、あらかじめ一定時間立つことが決まっている(3)の場合には完結相形式が、どの程度の時間立つか決まっていなかった(4)の場合には非完結相形式の方が適切となる。(3)の場合は、「2時間立つ」「3時間立つ」という形で事態の輪郭が明確であるため点として見ることができ、完結相での表現が適切となるが、(4)の場合は事態がどのような形のものになるかが明確でないため、非完結相での表現が適切となる。

- 3a 私は昨日2時間立った。今週中にあと3時間立とうと思う。  
b ??私は昨日2時間立っていた。今週中にあと3時間立っていようと思う。
- 4a ??目標額に達するまでやろうと決め、結局2時間立った。  
b 目標額に達するまでやろうと決め、結局2時間立っていた。

非過去時制においてもこの違いは見られる。

- 5a 私は昨日2時間立った。今週中にあと3時間立とうと思う。

b ??私は昨日2時間立っていた。今週中にあと3時間立っていようと思う。

なお、(5b)が不自然なのはテイルの意志形が不自然だからではない。次のような場合にはテイルの意志形が適切に使えるからである。

6 明日は目標額に達するまで立っていようと思う。

「遊ぶ」のような動作的な意味しかもたない動詞でも同じ違いが見られる。

7a 子供たちは1時間アスレチックで遊んだ。その後1時間バスケットボールをして遊んだ。

b ?子どもたちは1時間アスレチックで遊んでいた。その後1時間バスケットボールをして遊んでいた。

それに対して、英語においては、過去にある期間持続した事態を表現する方法は過去形しかない。

8a I stood at the corner for two hours.

「私は街角に2時間 {立った/立っていた}。」

b We lived in Tokyo for ten years.

「私たちは東京に10年 {住んだ/住んでいた}。」

c I played with the toy for two hours.

「私はそのおもちゃで2時間 {遊んだ/遊んでいた}。」

完結相と非完結相の対立が事態をどう捉えるかということであるのに対し、完了とはある事態がある基準時点以前に終了していることを表す。基準時点は過去、現在、未来のいずれでもありうる。Have+動詞過去分詞で完了を表す英語と、テイルで完了を表す日本語の例を挙げる。

- 9a She had arrived by 12.  
b She has already arrived.  
c She will have arrived by 5.

- 10a 彼女は12時にはもう来ていた。  
b 彼女はもう来ている。  
c 彼女は5時には来ているだろう。

その事態を完結相として捉えるか非完結相として捉えるかは完了の概念とは理論的には関係がない。それはまた、日本語においてテイルが非完結相形式でもあり、完了の意味をも表すということが予想されるようなことではないことをも意味する。実際、言語において非完結性（または進行）が完了と同一形式であるという例は珍しいようである。このように、完結性・非完結性という概念も、完了という概念も、本質的に発話時点との関係はなく、よって原理的には時制とは異なる体系をなすこととなる。

### 3. 非完結性に関する提案

上述したように、完結相・非完結相の対立はロシア語の「完了体」・「不完了体」のような、スラブ諸言語に見られる形式的な対立に基づいている。「不完了体」の表す事態は内部構造がある事態として捉えられ、進行もその中に含まれる。進行とは、基準時点の前にも後にもその事態が続いている状況であり、その意味では事態は内部構造があるものとして捉えられている。しかし、基準時点がその事態の外にある場合と基準時点がその事態の内にある場合（進行）、言語はどのようにそれらを形式化するであろうか。ロシア語のような言語では、基準時点が外にあって事態を非完結的に捉える形式と、基準時点が内にあること（進行）を表現する形式は同じ「不完了体」である。

11a Ivan čital, kogda ja vošel.(Comrie 1976:3)

「私が入って行ったとき、イワンは読書していた。」

b On čital. (Comrie 1976:1)

「彼は読書していた。」

(11a)は基準時点が内にある場合(進行)であるが、(11b)はそうではない非完結的意味を表す(ひとつの可能性は「彼は読書する習慣があった」)。また、日本語においても、基準時点が外にあって事態を非完結的に捉える場合にもテイル、基準時点が内にあること(進行)を表現する場合にもテイルが用いられる。次の二つの文におけるテイルは、その点で異なっている。(12a)では話し手は現在時点から過去に終了した事態について述べていてテイルは終了した事態を非完結的に表現しており、その事態のどこにも基準時点と考えられるようなものはないが、(12b)では「その事件があったとき」がその事態の内に基準時点として存在している。つまり、(12a)ではその事態の外から事態を非完結的に表しているが、(12b)では基準時点(「その事件があったとき」)が事態の内にある。(12b)のテイルは進行を表すが、(12a)のテイルは進行ではなく、事態を非完結的に捉えていることを表すのである。これは、(12a)の「住んでいた」が(13a)で見るように「住んだ」で置き換えることが可能であるのに対して、(12b)の「住んでいた」は(13b)で見るように「住んだ」で置き換えられないことからわかる。

12a 私たちは2001年から2005年まで東京に住んでいた。

b その事件があったとき、私たちは東京に住んでいた。

13a 私たちは2001年から2005年まで東京に住んだ。

b \*その事件があったとき、私たちは東京に住んだ。

しかし、事態の外から事態を非完結的に表現する形式と、基準時点が事態の内にあること（進行）を表現する形式が同じ形式ではない言語も存在する。その中には、進行という非完結的意味の一部分のみを表す形式をもつ言語（英語など）と、進行の形式をもたない言語（ドイツ語、フランス語<sup>4</sup>、中世以前の日本語など）がある。日本語のテイルは完了の助動詞「つ」の連用形と動詞「いる」から文法化したとされ、日本語でテイル・テアルが使われるようになった中世末期にはテイルもテアルも完了（「既然」）と進行の両方を表すとされるが、テイルはまだ進行を表す形式として十分発達しておらず、次のように進行であってもテイルが使われない例がある（福嶋 2005）<sup>5</sup>。

14 「雨は降るか、降らぬか」<sup>6</sup>と問ふ時、田夫のむすこ見ていふ、（醒睡笑 卷五 福嶋 2005:51）

「雨は降っているか、降っていないか」と…

そして、ある時制において事態の外から事態を非完結的に表現する形式が、その時制における基準時点が事態の内にある進行を表現しないという報告はあまり見られない。そこで、本稿では非完結相を考察するにあたってこの二つ（事態の外から事態を非完結的に表現する場合と基準時点が事態の内にある場合）を常に区別することとし、進行についての一般化を非完結相全体の一般化とすべきではないと主張する。WALS においても完結相と非完結相の対立について、“the basic opposition between one form (or set of forms) which is used exclusively or almost exclusively for single completed events in the past and another form (or set of forms) which is used for everything else) is characteristic of

<sup>4</sup> Être en train de ～「～している最中」という表現はあるが、使用は義務的ではないので進行形とは言えない。

<sup>5</sup> 福嶋は「動きのある」場合にテイルが用いられないとするが、次のように発話に関係する動詞では用いられるので、イルの「座っている」という意味に因ると考えた方がいように思う。

i. 親子三人念仏していたところに（天草平家 福嶋 2005:50）

<sup>6</sup> 原文にないカギ括弧を補ったもの。

the distinction(p.267)” (筆者訳：過去における一回性の終了した事態に限定されて、もしくはほぼ限定されて用いられる形式とその他のすべてに用いられる形式の対立がこの区別の特徴である) としているので、事態の外から事態を捉える場合を対象としていることになる。

このように考えると、例えば非完結相が完了と共起する例として、進行と完了の共起する例を挙げるのは不適切ということになる。例えば、次のような英語の例は、過去にある時間持続した事態を非完結的に表した例のように見える。

15a I had been standing at the corner for two hours when John came by.

ジョンが通りかかった時、私はすでに街角に二時間立っていた。<sup>7</sup>

b We had been living in Tokyo for ten years when my grandparents came to live with us.

祖父母が我が家に来た時、私たちは東京にすでに十年住んでいた。

c I realized that I had been playing with the toy for two hours.

ふと気付くと、そのおもちゃですでに二時間遊んでいた。

しかし、これらの表現 (英語の完了の形式 (have+動詞過去分詞) と進行の形式 (be+動詞 ing 形) の組み合わせ) は、ある事態 A の進行中に別の事態 B が起こったことを表しているのであるから、表現されているのは進行であり、事態の外から事態を内部構造があるものとして捉えているわけではない。よって、これらの表現は英語の中の非完結的意味の表現ではなく、英語に非完結相形式があると考えられる根拠にはならない。Comrie (1976:62)では英語における完了と進行 (I have been singing 「私は歌っていた」)、スペイン語における完了と進行 (tenho estado trabalhando 「私は働いていた」) を挙げて完了が非完結相と共起するとするが、これらの例に基づいて言えることは、完了が進

---

<sup>7</sup> 日本語においては、「すでに」がないと完了の解釈は得にくい。



行と共起するということのみであって、完了が非完結相と共起するという一般化はすべきではない。

#### 4. 完結相・非完結相と動詞の意味

WALSによると、事態の外から事態を完結的/非完結的に表現することができる言語とできない言語は同数程度存在する。また、前者の言語においても、WALSの記述が過去の事態に限定されていることからわかるように、ロシア語や日本語のようにすべて、または多くの時制においてその区別がある言語のほかに、過去時制においてのみ、その区別をもつ言語もある。過去時制において「インパーフェクト」「半過去」「線過去」と呼ばれる非完結相形式をもつフランス語、スペイン語、イタリア語などがよく知られた例である。後者の言語は部分的に完結相・非完結相の対立をもつ言語ということになる。

ロシア語と日本語は部分的ではない完結相・非完結相の対立をもつが、この両者には異なる点がある。ひとつには、日本語では動詞の単純な形は状態動詞を除いては継続的でない意味を表し、テイルを伴う複雑な形式が継続的意味を表すが、ロシア語では、大部分の動詞については動詞の単純な形は「不完了体」で継続的意味を表し、それになんらかの派生（もっとも多いのは接頭辞化）が加わった複雑な形式である「完了体」が継続的でない意味を表すということである。（このように派生された継続的でない意味をもつ「完了体」動詞にさらに接辞化が起こって継続的な意味をもつ「不完了体」動詞が作られることもある。これらの派生が、アスペクト的性質だけでなく意味の違いを生むこともある。）また、スラブ諸言語のアスペクト研究で常に指摘されるように、次のような応答においては（単純な形である）「不完了体」の動詞が用いられる。（例はロシア語。）

16 Vy čitali ‘Vojnu i mir’?

「あなたは『戦争と平和』を読んだ？」 -

Cital.

「読んだ。」(Comrie 1976:113)

上の訳からもわかるように、このような場合日本語はテイルを用いない。この事態は明らかに一回性の完結的なものなので、日本語ではテイルを伴わない形が用いられることに特段の説明は必要がないが、ロシア語で「不完了体」が用いられることには説明が必要となり、『不完了体』はある事態が起こったか起こらなかったかということだけが問題になっているとき用いることができる」という提案がされてきた(Comrie 1976:113)<sup>8</sup>。このように、形態的に単純な動作動詞の意味が継続的か継続的でないかという違いが見られる。

また、フランス語などでは、過去においてのみ完結相と非完結相の対立がある。フランス語を例にとれば、基準時点が外にあって過去の事態を非完結的に捉える形式は(17a)のように lire (読む) の「インパーフェクト」lisait、基準時点が内にあって基準時点が過去である(つまり過去における進行である)ことを表す形式も(17b)のように lire の「インパーフェクト」lisait だが、基準時点が内にあって基準時点が現在であることを表す形式(現在の進行を表す形式)は(17c)のように lire の現在形 lit である。

17a Jean lisait ‘Le Monde’ quand j’entrai.

「ジャンは私が入って行ったとき『ル・モンド』を読んでいた。」

b Jean lisait ‘Le Monde’.

「ジャンは『ル・モンド』を読む習慣だった」

c Jean lit ‘Le Monde’.

「ジャンは今『ル・モンド』を読んでいる/ジャンは『ル・モンド』を読む習慣だ。」

---

<sup>8</sup> また、Comrie は「完了体」を用いた Vy pročitali ‘Vojnu i mir’? はより具体的で、聞き手が『戦争と平和』を読み終えたか尋ねているとしているが、そうであるならば日本語の「テイル」と同じようにロシア語の「不完了体」が完了の意味をもつという分析もできない。

つまり進行と言う観点から見れば、同じ進行であっても、基準時点が過去であれば「インパーフェクト」、基準時点が現在であれば動詞の現在形を用いる。現在進行中の事態を表すのに動詞の現在形が用いられるわけだから、(17c)の事態が「現在進行中」であることが表されている以上、動詞が継続的な意味をもっていると考えざるを得ない。ドイツ語についても「現在進行中」の事態は形態的に単純な動詞の現在形で表される。それに対し、英語では「現在進行中」の事態は進行形という複雑な形式で表される。この動詞の性質と、完結相・非完結相の対立をもつか否かを表にすると次のようになる。

完結相・ 非完結相の 対立 形態的に 単純な動詞の意味	完全	部分的	なし
継続的でない	日本語		英語
継続的	ロシア語	フランス語	ドイツ語

## 5. アスペクト的意味の表現

一部の意味領域は文法形式によっても語彙項目によっても表され得る。例えば、言語によっては名詞に数の情報が義務的に表示されるが、そういうタイプの言語でもそうでないタイプの言語でも、数字を語彙的に表現することはでき、文法形式によって表現された場合より具体的に表現される。同様に、アスペクト的意味も文法的なアスペクト形式によらずに表現されることもある。しかし、アスペクト的意味については完全に文法化された表現と完全に語彙的な表現との間の様々な段階の表現が見られる。また、語彙的な意味としての表現には、動詞の意味としての表現も含まれ、それを指すためにAktionsartという用語が使われる。例えば、英語のstandと日本語の「立つ」は非常に似た意味をもっているように見えるが、それぞれの過去形と未来の

事態を表す形式を用いた文を比べると、意味的には対応していない。英語の stand が「立った状態にいる」という状態的な意味と「立った状態になる」という変化の意味の両方をもつのに対し、日本語の「立つ」は「立った状態になる」という変化の意味のみをもつ。

18a She stood. (=彼女は立っていた。/彼女は立った。)

b 彼女は立った。

19a I'll stand. (=私は立っている(ことにする)。/私は立つ(ことにする)。)

b 私は立つ(だろう)。

同じように、sit は「座った状態にいる」という状態の意味と「座った状態になる」という変化の意味の両方を表すことができる。

20a She sat. (彼女は座った。/彼女は座っていた。)

b 彼女は座った。

状態的な意味すなわち継続的な意味をもつ動詞と、状態への変化の意味すなわち継続的でない意味をもつ動詞を例として挙げたが、上述したように、ロシア語のような言語ではほぼすべての動詞について、完結相の動詞と非完結相の動詞のペアがあり、それぞれ継続的でない意味と継続的な意味をもつ。それに対して、日本語のような言語ではそのようなことはほとんどなく<sup>9</sup>、それぞれの動詞がアスペクトに関しての性質をもち、それによってどのようなアスペクト形式と共起できるかが決まっている(金田一 1950 など)。ただし、日本語でも「～始める」「～続ける」といった要素を第二要素としてもつ複合動詞が存在し、統語的な複合動詞とされる(影山 1993)が、生産性・合成性

---

<sup>9</sup> 「持つ/持っている」、「知る/知っている」などはそうであろう。

の面で完全に統語的と言えるものはむしろ少ない。英語は完結相・非完結相の対立をもたない点で日本語とは異なるが、動詞のアスペクト的性質をどの程度語彙的に変化させるかという点については日本語よりやや多いという程度である。stand は状態的な、つまり継続的な意味をももつが stand up という句動詞は変化という継続的でない意味のみをもち、sit は同じように状態的な、つまり継続的な意味をももつが sit down, sit up という句動詞はそれぞれ「立った状態から座った状態になる」、「寝ている状態から座った状態になる」という継続的でない意味のみをもつ。(eat「食べる」と eat up「食べつくす」、drink「飲む」と drink up「飲み干す」は形式的には同じだが、eat, drink がそもそも継続的でない意味をもつ<sup>10</sup>ので、句動詞とその点では同じである。) ドイツ語も英語同様完結相と非完結相の対立をもたないが、次のように継続の意味をもつ動詞と継続的でない意味をもつ動詞のペアが存在する。

- 21 blühen (咲く) /aufblühen (咲き出す); verblühen (しぼみ始める), essen (食べる) /aufessen (すっかり食べる), laufen (走る) /loslaufen (走り出す), schlafen (眠る) /einschlafen (眠りこむ)

このように、動詞のアスペクト的性質がどの程度語彙的意味あるいは文法的意味を用いて表されるかということが言語によって異なっている。

## 6. 完了

完結相・非完結相の対立をアスペクトの基本的な性質とした上で、それと

<sup>10</sup> ただし、これらの動詞は継続的な意味をももつ。そのため、for ～という時の副詞とも in ～という時の副詞とも共起する。

ii. We ate for two hours.  
「私たちは2時間食べ続けた。」

iii. We ate in two hours.  
「私たちは2時間で食べた。」

は関わりがなくてもアスペクトとして扱われることの多い完了をどのように位置付けたらよいのか考えてみる。

まず、完了の定義として、「事態が基準時点以前に終了していること」「その事態の結果が基準時点になんらかの形で及んでいること」の両方を含むものがよく見られ、WALS でもその定義を用いている。しかし、後者の条件が前者の条件に依存していること、通時的に完了の形式が過去時制の形式に変化することが見られること（つまり、基準時点が発話時点が変わると共に後者の条件が消滅すること）、言語によっては過去時制に変化してはいないが後者の条件を満たさず、完了の形式にとどまっている形式があることから、完了の定義は前者の条件のみとする。その上で、「事態が基準時点以前に終了していること」を表す形式が必要な理由はそれぞれの言語に存在する他の形式とのとの関係で決定され、そのためにそれぞれの言語での、「事態が基準時点以前に終了していること」以上の完了の特徴が決まる、と主張する。例えば、中国語はテンスをもたないため、完了のアスペクト形式「了」が用いられ、「基準時点についてはそうではないという標識がない限り発話時点と解釈する」という語用論的ストラテジーのもとで、テンスをもつ言語で過去時制によって表される事態の多くを表している。それに対し、テンスをもつ言語においては、「ある事態がある基準時点以前に終了している」ことだけを表す形式を用いる必要は、テンスをもたない言語ほど大きくない。そのため、テンスをもたない言語よりは「ある事態がある基準時点以前に終了している」ことを表す形式を用いるなんらかの別の動機がある可能性が高い。そのうちのひとつが「事態の効果が基準時点に及んでいる」ことを表すことなのである。ほかにしばしば完了の表すことのできる意味として、「経験」があるが、これは「事態の効果が基準時点に及んでいる」ことのサブケースと考えてよい。日本語の完了のテイルは、「何らかの痕跡・記録を根拠として事実があったことを述べる」という意味を表す場合がある<sup>11</sup>が、これは「事態が基準時点以

<sup>11</sup> Binnick (1991:388)に Kyoko Inoue (1975) “Studies in the Perfect” Ph.D. dissertation, University of Michigan が指摘しているとの記述が(22)の例とともにある。

前に終了している」という性質から説明することはできない。「事態の効果が基準時点に及んでいる」という意味が「事態の痕跡・記録が残っている」という意味にまで広がり、そこからさらに「事態の痕跡・記録に基づいて述べる」という意味に広がったことが考えられる。

22a ジョンは 1960 年にジェネラル・モーターズを {やめさせられている/?やめさせられた}。

b 私は同じ年にクライスラーを {?\*やめさせられている/やめさせられた。}

英語の完了のもつ「最近のできごと」という意味も、「その情報が新しいため驚きなどの結果が基準時点＝発話時点に及んでいる」と考えれば「事態の効果が基準時点に及んでいる」という意味の拡張として捉えられる。

また、完結性と非完結性が対立して体系を成していることには疑いがないものの、完了の場合には何と対立する概念なのかを考えると、「基準時点においても事態が始まってはいるものの終了していない(=進行)」ことである。とすると、完了は非完結相的意味の一部である進行と対立しているのであり、実際言語によっては似た性質をもつ形式によって完了と進行を表すものが存在する(英語、中国語など)。完了が非完結的意味の一部である進行とともに体系を成している場合(つまりそれぞれ異なる形式で表される場合)、完結相・非完結相の対立とは両立しにくいように思われるが、それについては実際の言語を調査して検証して行く必要がある。

## 7. 終わりに

本稿では完結相・非完結相の対立が言語においてどのように見られるか、そしてその対立と関わらない完了の概念について考察した。まず、非完結相的意味に含まれるものの中で、事態を外から非完結的に捉えることと、事態を内部から捉えることを区別するべきとした。前者の表現が可能な場合にの

みその言語においては完結相・非完結相の対立があると言える。進行の意味のみをもつ形式の存在があったとしても、事態を外から非完結的に捉える形式が存在しなければ完結相・非完結相の対立ではない。また、他の形式、例えば完了との共起の可否を検討する場合にも、非完結相形式が事態を外から捉えているのか内から捉えている（進行）のかを区別する必要がある。

完了を表す形式については、「事態が基準時点以前に終了している」ことのみを基本的な意味とし、それぞれの言語に見られる他の意味は、その言語において関連領域の意味を表しうる他の手段との関係によって決まるとした。

## 参考文献

- Binnick, R. I. (1991). *Time and the verb: A guide to tense and aspect*. New York: Oxford University Press.
- Comrie, B. (1976). *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, Bernard Comrie (2005) *The World Atlas of Language Structure*. Oxford U.P. (ウェブサイト <http://wals.info>)
- Vendler, Zeno (1957) "Verbs and times." *The Philosophical Review* 66(2):143-160.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15:48-63.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 福嶋健伸(2005)「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」東京大学『国語と国文学』81-2:47-59 (『日本語学論説資料 CD-ROM 版 42号第2分冊 増刊』所収)